

動き出すドキュメンテーション(1)

—保育者と保護者の関係と対話をキーワードとして—

○高橋 陽子(お茶の水女子大学附属幼稚園) 小玉 亮子(お茶の水女子大学)

佐藤 寛子(お茶の水女子大学附属幼稚園)

はじめに

本発表テーマが、「動き出すドキュメンテーション(1)」となっているのは、続く「動き出すドキュメンテーション(2)」の発表と連続しているためである。それぞれ異なる試みであるが、同一の国立大学附属園で、同時に行われているものであり、これらの二つは密接に関わり合いながら進められたものとなっていることから、(1)と(2)と連続した発表を行うこととした。これら(1)(2)として行う二つの発表には、以下の三点の特徴を持つ。

第一の特徴は、保育の「記録」に「動き」を導入したことにある。記録というと、何かの成果とか、何かの結果が記されたものとか、いずれにせよ最終的に残していくものとして、理解されているのではないだろうか。記録がそのような意味を持つことを理解しつつも、今回挑戦したのは、動的な記録である。

変化するもの、プロセスであるもの、進化しつづける記録はどのようにして可能なのかを探りたい。

第二の特徴は、「関係」をキーワードとして記録を考えたことにある。誰か一人によって作られた記録ではないことに今回の試みの独自性がある。もちろん、複数の保育者や子ども自身が共同して作る記録もあるし、保育者と保護者が交互に情報交換していく記録にも長い歴史がある。今回の試みの特徴は、外部から子どもたちの日常を観察した記録でもなく、自分の感じた思いを論じた記録でもない。保育者と保護者、保育者と保育者、保育者と保護者と子どもといった諸関係から生み出される記述に挑戦した。諸関係が交差するところに、何が生み出されるかについて考えたい。

第三に、「対話」をキーワードとして記録のあり方を考えた。先に、異なる眼差しが交差すると述べたが、そこには、異なる言葉が発生する。モノログではなく、対話(ダイアログ)の中で進む記録はどのように可能なのか。異なる言葉がどのようにキャッチボールとなって展開していくのか。必ずしもボールは他者に向けて投げられるとは限らないし、取りこぼされるかもしれない。しかし、複数の声が交差する対話が試みられる時、そこからどのようなものが現れてくるのかを読み解きたい。

ここでの記録は、プロセス・関係・対話をキーワードにしながら、「開かれたもの」として試みられた。ドキュメンテーションが、子どもの学びをヴィジュアルに記録するものであることは、レッジョ・エミリア市の幼児学校の実践から広く認識されるようになってきている。今回の試みが広く公開されるドキュメンテーションであるという点で、レッジョの実践と共鳴しあうものであると言える。

これまで、様々な「記録」のあり方についての検討は積

み重ねられてきた(例えば、梶 2019,大豆生田・岩田 2019,河邊 2019)。今回の記録の試みも、これまでの議論から多くのものを得ている。日本で蓄積された記録のあり方に加えて、同じ附属のナーサリーの現在進行形の実践からも大きな影響を受けている。何より直接的には、イギリスでのいくつかの園を視察し、そこで見てきたドキュメンテーションの実践から受けたインスパイアが大きな意味を持っている。

この意味で、この実践それ自体もまた、諸関係との対話から生まれた、記録の試みであるということができる。

イギリスで見た保育者と保護者との対話

2019年3月に、イギリスの三つの幼児教育施設への視察を行った。訪問したのは、ロンドン近郊の Madeley Nursery School、ロンドン市内にある Rachel McMillan Nursery School 及び Sheringham Nursery School である(佐藤 2019, 高橋 2019)。

今回訪問した三園ともに、一人一人の子どもの作品帳とプロフィール帳(以下、ファイルと呼ぶ)が、各保育室の誰でも手に取れる場所に置いてあった。作品帳は、その子どもが一つの作品を作り上げるまでの様子を撮った写真や、作品そのものが貼ってあり、保育者や保護者のコメントも書いてあった。プロフィール帳の方は、ナショナルカリキュラムとして定められている7領域について、それぞれに対する一人一人の子どもの取り組みや変化、達成度について記録され、これにも保育者と保護者のコメントが書いてあった。

これらは送迎の際に保護者が見たり、保育者と保護者がファイルを元に語り合ったりし、保護者が自宅に持ち帰りコメントを記入してくることもあるということだった。

ファイルは、写真が効果的に使われていて、一人一人の姿や保育者の思いが伝わってくるもので、様子や変化を容易に捉えられ、保育者と保護者がやりとりを重ねることで、子どもについて思いを共有し、対話が生まれる。さらに子どももそれを見ることができると、三者の関係が深まると考えられた。

このファイルは卒業の時に持ち帰り、小学校に子どもが自分で持っていくとのことだった。一人の子どもの育ちについて、ファイルを通して幼稚園と家庭と小学校との対話が生まれているということであろう。

また、保育室や玄関などの壁に、写真や作品が貼られていて、保育者のコメントが書かれているもの(以下、掲示と呼ぶ)があった。園やクラスの様子を伝え、保護者の理解が深まるであろうと想像することができた。

本園での保育者と保護者との対話(1)

イギリスでの取り組みを視察し、本園の保護者と保育者との対話のありようについて振り返ることにした。

以前より本園では、送迎時や面談日を設けて子どもの姿や変化、気になることについて保護者と保育者との対話をする機会をもっていた。しかし、面談は学期に一度であり、送迎時にいっても声をかけ合うタイミングがなかったり、声をかけづらいという声が保護者から聞こえてきたりした。そこで数年前から、学年ごとに毎朝 A3 縦版用紙に横書きで前日の様子や本日の予定や伝言を書いて掲示することになった(掲示板は玄関スペースに学年ごとに設け、登降園時に見ることができる)。毎日書くことで、日々の子どもの変化が伝わるよう心がけてきた。その後、行事や継続した活動などについては写真や図絵を組み合わせたドキュメンテーションを学年担任が協力して作成し掲示するようになった。行事の翌日に掲示することで「子どもが言ったのは、こういうことだったのね」「何も話さないけれども、様子がわかった」「子どもとの話のきっかけになる」という保護者の感想が聞かれた。

字でのみ書く掲示にしても、写真や図絵入りの掲示にしても、「自分の子どもが活動の中でどうだった」ということではなく、「学年のみんなでこのように取り組んだ」ということを伝えるようにした。保護者には、我が子だけではなく学年や幼稚園全体、いろいろな人との関わりの中で生活していることを意識して欲しいこと、そのことから自分の子どもについて考える機会になって欲しいこと等の願いが込められていた。実際、面談で、これらの掲示をきっかけにして、具体的に話し合える機会が増えた。

今年度本園研究会(以下、園内研)でイギリスのファイルや掲示について話題にしたところ、一人の子どもについてその保育者と保護者とで共有しているイギリスと、園と保護者が、いろいろな人やコトを共有するためのツールになっている本園との違いが見えてきた。「イギリスでも一人一人を大事にしている。でも、本園で考える一人一人とは、考え方が違うのではないか。本園では、あくまで人やモノやコトとの関わりの中で見ている一人一人である」ということを確認する機会となった。

本園での保育者と保護者との対話(2)

園内研で掲示について「保護者とのつながりのツールになっているが、一方通行的である。双方向のやりとりにしたい」という話題があがった。小玉氏からは「付箋を使えば保護者と園とのやりとりの変化が見えるのではないか」という助言を受けた。ファイルを通じて何度もやりとりをして、積み重なっていくイギリスの記録のように、保護者が参加のできる掲示を考えていくことになった。

最初の試みとして、入園プレゼントを年長児が作っている様子や年中・年少児へ手渡す場面を、写真や教師のコメントで綴った大きな円形用紙を玄関の丸テーブルに置き、学年色別の付箋とペンも用意しておき、感想などを付箋に書いて貼ってもらうようにした。付箋を書くか書かないかの参加は自由であり、無記名とした。期間は

1週間ほど置いておくことにし、すぐに書く、他の人の様子を見たり付箋を読んだりしてから書く、自分の中で温めてから書くなど、それぞれの裁量ができるようにした。結果として、数日後には付箋が所狭しに貼られていた。保護者同士のぞき合ったり、玄関に来た子どもたちと副園長と一緒に見て、その時のことを思い出して感想を伝え合ったりすることもあった。

保護者がどのように感じたのか、子どもは家庭でどのような話をしているのかなどが伝わってきて、どのように園の取り組みが子どもや保護者に受け取られているのか、園側が理解する機会となった。この時は園発信⇄保護者の付箋で戻す一往復のやりとりであったが、その後園や学年担任発信⇄保護者の付箋⇄園や担任付箋⇄保護者・・・のように、一往復半以上のやりとりに変化していった。(図1~3)

また、各学年の掲示板には、前週の様子を写真とコメントで組み合わせた A3 の掲示を貼ることにした(2019 年度 5 月から)。これは、次週の週案に載せる記録を保護者にも掲示することにしたものである。全員の子どもや遊びが載っているわけではないが、保護者にこのような中で子どもたちは生活していることを伝え、話題や思いを共有してもらって変更した。各学年掲示板の近くにも付箋を備え、保護者が感想や気付き、質問などを書いて貼るようにして、保育者はコメントから気付かされたことやそこにある思いなどを付箋に書いて貼る、という対話を重ねている。

本園での保育者と保護者との対話(まとめ)

本園での保育者と保護者の対話は、一人の子どもについて保育者と保護者でやりとりを重ねていくイギリスとは違い、学年、園全体など集団的に進んでいく。保育者からの発信を学年を超えて保護者が読み、感じたことを付箋に書く、心にためる、近くにいる保育者や保護者同士で話す、子どもや家族と共有するなど、関わり方は自由で、多様である。付箋を読んだ保育者も、心動かされ、付箋に思いを書いて貼り重ねる。付箋に保護者が書く行為や付箋の貼られた掲示、付箋の増えていく様子を見ている保護者もいる。このやりとりのプロセスを、多様な人たちが見ている。何層にも重なるやりとり、協働的に参加し考えていく過程が、関わりの中で子どもたちの育ちを捉え、支えていくために、ドキュメンテーションの有効性について引き続き探っていきたい。

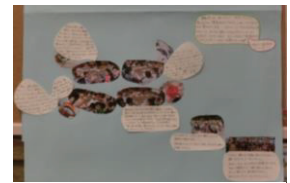


図1 年長組 10月9日

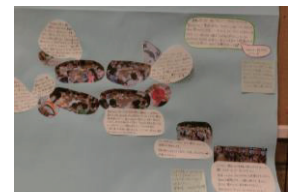


図2 年長組 10月10日

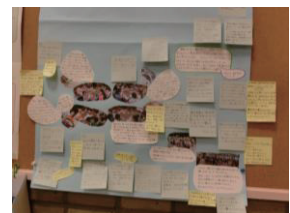


図3 年長組 10月22日